

令和4年度 秋季特別展

また！ナニこれ？

—奈良市出土の用途不明品—



例 言

1. この冊子は、令和4年10月1日～令和4年11月30日まで奈良市埋蔵文化財調査センターで開催する、令和4年度秋季特別展「また！ナニこれ？－奈良市出土の用途不明品－」の解説パンフレットです。
2. 掲載写真は、展示品のすべてではありません。
3. 掲載した写真は、奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター及び佐藤右文が撮影しました。
4. 本書の執筆・編集・レイアウトは、埋蔵文化財調査センター職員の協力のもとに、原田憲二郎が行いました。

I. ナニこれ！コレなに？

奈良市内の調査で出土した遺物の中には、類例も少なく、その形状・材質をみただけでは、使い方がよくわからないものがあります。ここではそのような、ある意味、謎を秘めた興味深い遺物を紹介します。

円柱状突起がある土製品（縄文時代晩期）



1. 円柱状突起がある土製品

大森町で発見された河川から、縄文時代晩期の土器と一緒に出土しました。

長さ・幅とも約3cm、高さ約2.5cm程度の小さな土製品です。

冠形を呈し、中央に鶏のトサカ状の突起があります。片方しか残存していませんが、その左右にカタツムリの目のような円柱状突起を有していたと考えられます。

頭部の一方に、焼成前に径約0.5cmの孔があげられています。他に類例は見当たらず、その用途は不明です。

しゃくし 杓子形木製品（弥生時代後期）



3. 杓子形木製品



2. 杓子形木製品出土状況

大森町で発見された径約0.8m、深さ約1mの平面円形の土坑から、広口壺4点、たんげいこ短頸壺3点、ちょうげいこ長頸壺1点、かめ甕1点、小型高杯1点の、計10点の弥生時代後期後半の土器と一緒に出土しました。柄の先端は欠損しており、残存する長さは約38cmです。身部の長さは16cm、幅は11cmで、片面を先端に向かって斜めに削り、刃状にしています。刃部は偏った磨り減りがみられます。

一緒に出土した土器は、いずれもほぼ完形を保っており、破損したために廃棄されたものでは無いようです。この木製品は、土器とともに集落内の祭祀に使用され、その後、埋められたものと考えられますが、どのような使い方をしたものであったのかは不明です。

刺突紋がある土器（弥生時代後期）



4. 刺突紋がある土器

東九条町で発見された溝から、弥生時代後期後半の土器と一緒に出土しました。

高さ3cm、残存幅4cmの小さな土器片ですが、緻密な紋様が施されています。上面の平坦面の端と、側面の底部付近に刺突による小さな円形の孔が、連続して開けられています。孔はいずれも外側からの刺突により、あけられています。また他にも側面には直径2cm程度の大きい円形の孔があげられ、その上には綾杉紋が施されています。

復元では径8cm程度の器台状となりますが、器台とするにはあまりにも小さく、この上に載る器も想像できません。

石製有孔円板（古墳時代中期）



5. 石製有孔円板

山町に所在する5世紀の前方後円墳、ベンシヨ塚古墳の後円部頂にある第3埋葬施設から出土したものです。

有孔円板は古墳時代の各地の古墳や、祭祀遺跡から出土しています。

鏡の模造品や、糸をつむぐ道具である紡錘車の模造品、あるいは周代から漢代にかけての祭器・宝器である璧の模造品という意見もあります。枝に架けて祭儀で使用されたとの指摘もあります。

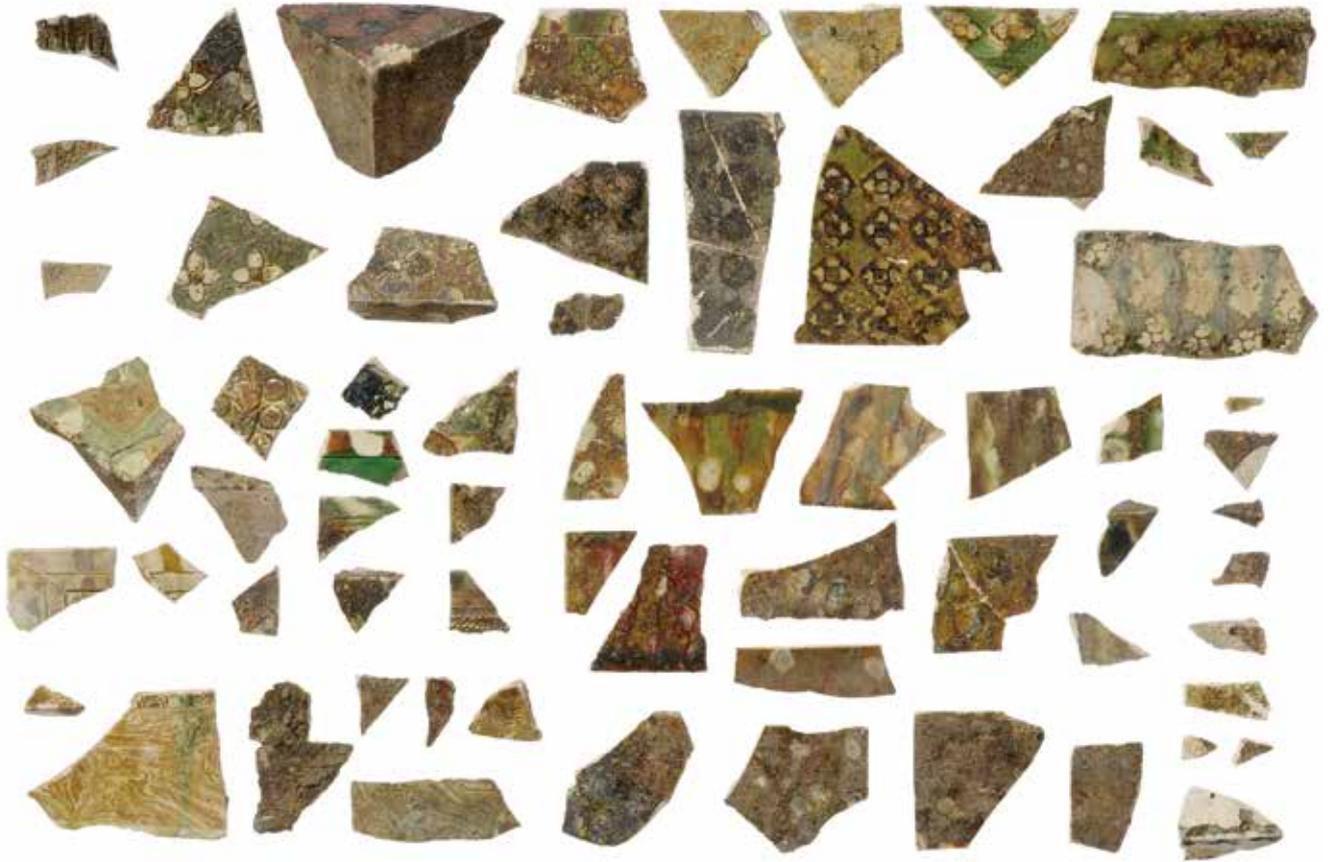
ベンシヨ塚古墳出土品には、孔がひとつ9点と、孔が2つ7点に分類できます。孔がひとつのものは、断面形が半球形を呈しており、紡錘車を模したものと考えられます。

唐三彩陶枕（奈良時代）

8世紀初めに平城京内に建立された大寺院である大安寺から出土しました。特に金堂跡と講堂跡の間に広がる焼土層からは、これまでに約300片にのぼる唐三彩陶枕がみつかっています。これらは大安寺の僧、道慈が養老2年(718)に唐から請来したものとみられています。

唐三彩は8世紀に中国の唐で盛行した施釉陶器で、白色・緑色・褐色、時に深い藍色の多彩な鉛釉を施しています。また、赤褐色の粘土と白色の粘土を練り合わせて精巧な縞模様の素地を作り出した絞胎に鉛釉を施したものもあります。唐では実用品としてだけでなく、墓への副葬品としても用いられています。

陶枕は箱形で、中は中空になっています。表面には花や唐草、鳥などの紋様がみられます。唐代の小説には実際に枕として使用されたと理解できる記述があります。ただし、枕として頭をのせるにはやや小さいことから、文字を書く際に腕を置いた腕枕、あるいは脈をとる際の医療用の腕枕、他にも文鎮、器物の台と様々な説が出ています。また、唐三彩を模倣した奈良三彩の製作見本としてもたらされたという指摘もあります。



6. 唐三彩陶枕

球状土製品（平安時代）

法華寺町の市立一条高校の施設建築に係る発掘調査では、9世紀の大型の井戸がみつかりました。杵を据える穴の直径は6m以上、井戸杵は約2.2m四方の大きさで、深さは4.6mです。井戸杵は井籠横板組みと呼ばれる組み方で、杵板1枚の長さは2.5m、幅30cm、厚さ15cmもあります。出土土器の年代から、井戸は9世紀初め頃に造られ、9世紀半ばに改修が行われ、10世紀初め頃に埋没したとみられます。

球状土製品はこの井戸杵内から出土しました。9世紀後半のものとみられます。高さ約7cm、幅約9cmでやや横長の球状です。上部中央に径約3cm、深さ約2.5cmの穴を設けています。製作時の表面調整は粗く、凹凸が残ります。他に類例は見当たらず、用途も蠟燭立てぐらいしか思いつきません。

なお今回の展示では、この法華寺町所在遺跡の井戸杵内からの出土遺物を多数展示しています。



7. 球状土製品



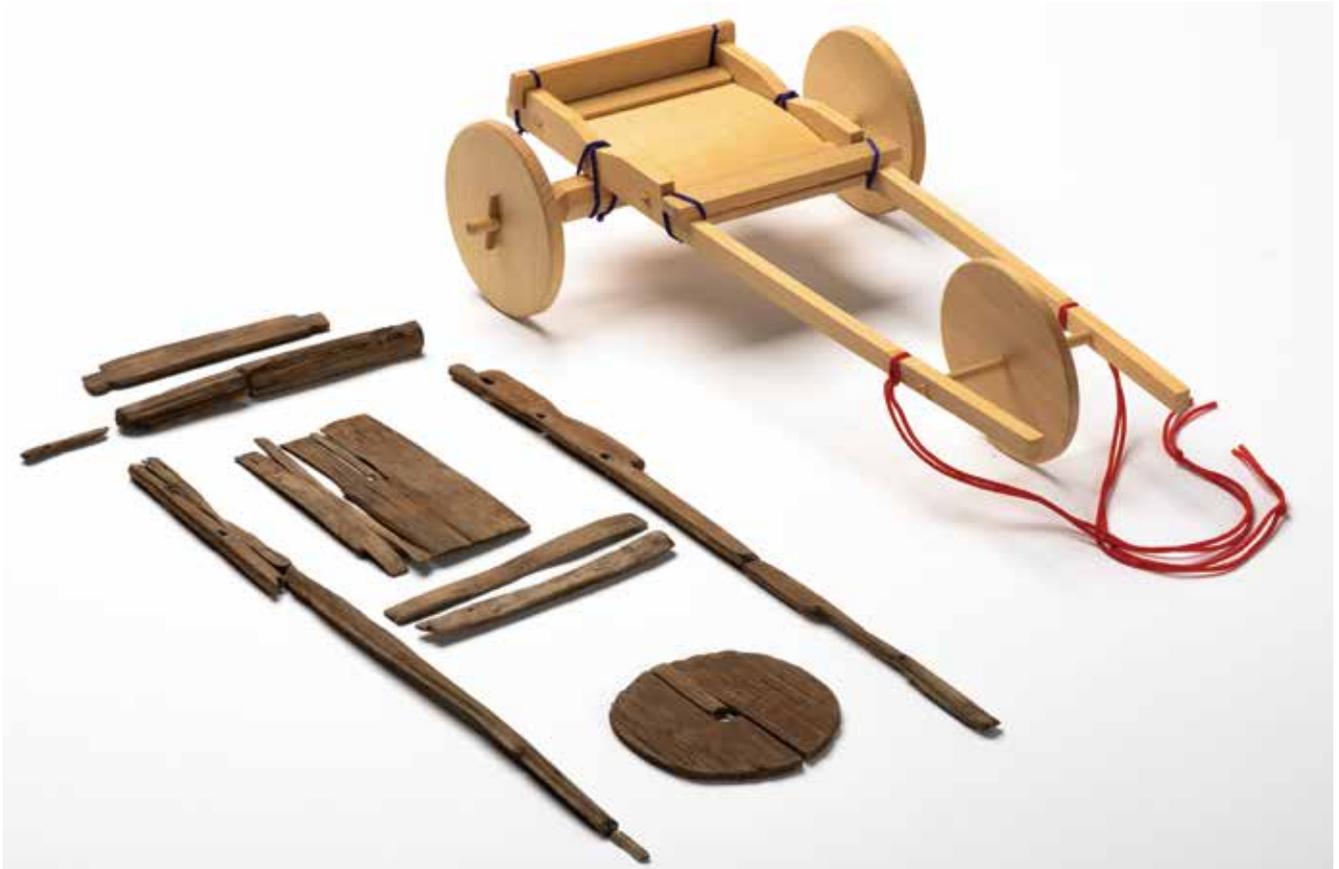
8. 大型井戸（上）とその調査風景（下）

車形木製品（鎌倉時代）

奈良市役所北側の立体駐車場建設に係る発掘調査で、土器などを製作するために粘土を採掘した穴から、天地逆転した状態で出土しました。一緒に出土した土器の年代から13世紀のものとみられます。

大きさは長さ40cm、幅24cm、車輪の直径は10cmで、前輪1個と後輪2個の計3個の車輪がついていたとみられます。こうしたミニチュアの車は他に出土例も無く、はっきりとした用途は不明です。

鎌倉時代の絵巻物である『直幹申文絵詞』^{なおもとうしりみえことば}には子供が同様の車を引く姿がみられ、玩具として使われた可能性が考えられます。一方『今昔物語集』^{こんじやくものがたりしゅう}巻24第15には、神事の際にミニチュアの車を使ったことがわかる記述があり、まじないの道具の可能性もあります。



9. 車形木製品とその復原模型



10. 車形木製品出土状態

円板状土製品（奈良～室町時代）



11. 孔が無い円板状土製品



12. 孔がある円板状土製品

瓦や土器のかけらの周縁を打ち欠き、整えたり磨いたりして、平面形円形に仕上げたもので、全国各地の遺跡から出土しており、特に中世の遺跡からの出土が目立ちます。

奈良市内出土の円板状土製品は、中央に孔を有するものと、孔が無いものとの二つに大別できます。他に少数ですが、貫通しない穴を有するものがあります。

孔を有し、丁寧に円形に加工したものは、糸をつむぐ道具である紡錘車、あるいは厚手のものは、発火具等に使用する舞錐の弾車まいぎり はすみぐるまの可能性が考えられます。

孔が無いものについては、冥土へもっていく銭ではないかとする考え、印地と呼ばれる石合戦の石として用いられたとする考え、あるいはお手玉やおはじきに使われたとする考えなどが出されています。



13. 穴がある円板状土製品

円柱状土製品（時期不明）



14. 円柱状土製品（左）とその側面（右）

奈良町遺跡の遺物包含層から出土したもので、詳細な時期は不明です。上面は径約 15.4 cm で滑らかですが、平坦ではなく、中央ラインをやや高め、その両側はやや低くなっています。側面は丁寧に平滑にしています。一方、下面は焼成前に荒く欠き取った痕跡を残しており、細かい調整はされていません。類例も無く、用途は不明です。

Ⅱ. ナニこれ！何を表現？どんな意味が？

何を表現したものかわからない造形や、何を表現しているかはわかるものの、どんな意図が込められているものかわからない造形を紹介します。また、はっきりとした意味がわからない線刻画や墨書もあわせて紹介します。

絵画土器（弥生時代後期）



15. 絵画土器（左奥2点：大宮町七丁目、右手前：三条本町出土品）

いずれも河川から出土した弥生時代後期の土器です。

甕と壺の2点は大宮町七丁目で見つかりました。甕には爪の圧痕を三列に並べて、毛虫のようなものが地面から出てきているような表現をした絵が描かれています。毛虫のようにみえますが、龍の表現とする見方もあります。この甕と隣接して出土した壺には刺突により三本爪の跡のような紋様があります。これも龍の表象とみる意見があります。

長頸壺は三条本町で見つかりました。長頸壺の体部上半には渦巻きの両端をS字状につなげた線刻があります。これも長い体をねじらせた龍の表現であるとの見方があります。

石見型埴輪（古墳時代後期）



16. 石見型埴輪

3点ともに菅原東遺跡の集落の西限を画する溝から、5世紀後半の土器とともに出土しました。菅原東遺跡は縄文時代から室町時代の集落遺跡で、古墳時代後期の埴輪を製作した窯跡もみついています。

石見型埴輪は形象埴輪の一種で、奈良県磯城郡三宅町の石見遺跡で多数発見されたことから、「石見型」と呼称されています。石見型埴輪は上方と下方の両端が扇状に開き、中央がくびれる形態で、上方にはえぐりがあります。表面の各所には小孔をあけています。直弧紋などの紋様が線刻された大型のものが古く、新しいものは無紋で小型になります。大半が近畿地方で出土しています。古墳時代中期末に定型化したものが出現し、後期後半まで作られました。

矢を背負うための道具である鞞ゆきや盾の形を表したものとされていますが、未だ定説はありません。

人面が付いた浄瓶片（奈良時代）



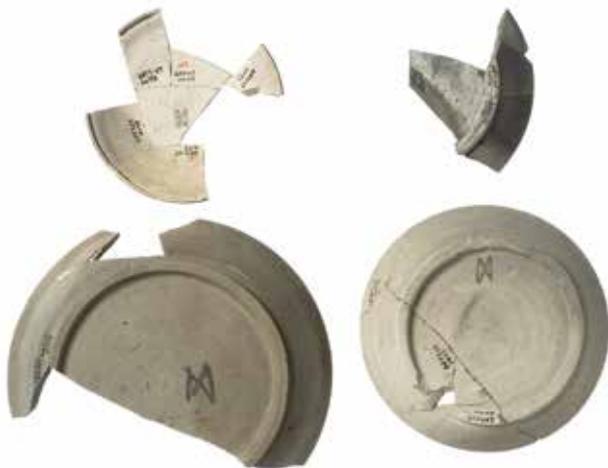
17. 人面が付いた浄瓶片

東大寺転害門の東側の発掘調査でみわかりました。須恵器の浄瓶の受水口部の破片で、人面が線刻されています。受水口部の高さは 4.5 cm、胴部に取り付く部分の幅は 2.5 cm、受水口部の口径は 3.4 cm です。8 世紀のものともみられます。

浄瓶は、低い高台が付いた卵形の胴部に受水口が付き、頸部の上方に細長い口が備わる形態の器です。僧が使用する僧具の一種で、受水口部から水を入れ、頂部の細長い口から水を飲む特殊な用法の器です。

人面が付いた浄瓶は土器類での類例は他にみつかりませんが、受水口部にトルコ・イラン系の胡人の顔をあらわした佐波理（銅に錫・鉛を加えた合金）製のものが、正倉院と法隆寺に伝わっています。これらは、ヒゲや髪の毛まで丁寧に表現しています。本例はヒゲの表現もなく、胡人にはみえませんが、土器でまねて製作されたものと思われます。

リボン記号の墨書土器（奈良時代）



18. リボン記号の墨書土器

平城京東市が推定される左京八条三坊十二坪内で発見された井戸からみつかった墨書土器です。

13 点あり、いずれもリボン形の記号が墨書されています。13 点の墨書された土器の種類の内訳は土師器皿もしくは杯が 4 点、須恵器杯 6 点、杯の蓋 2 点、鉢 1 点です。リボン形の意味は、所有者または特定組織をあらわすマークとみられます。

鳥紐蓋（奈良～平安時代）



19. 鳥紐蓋

左：平城京右京二条三坊四坪出土品、右：平城京左京五条条間北小路北側溝出土品、奥：平城京右京二条三坊二坪出土品

蓋に鳥の頭部を表現した須恵器です。羽毛は線刻で表現されています。灰緑色のきれいな自然釉がかかり、8 世紀後半から 9 世紀後半にかけて尾張国（愛知県）猿投窯で生産されたものとみられます。

平城京跡で 3 箇所出土例がある他、群馬県・長野県・愛知県等でも確認されており、特に長野県諏訪市の鐘鑄場遺跡では把手部に鳥の尾部を造形した須恵器の平瓶とともに出土したことから、平瓶を鳥の胴部に見立て、蓋に鳥の頭をつけて装飾としたものと考えられます。

鳥紐蓋が出土した平城京右京二条三坊二坪では「酒司」「酒口」という墨書のある須恵器杯蓋が出土しています。また、右京二条三坊四坪でも、中身が酒であったとも考えられる多量の埋甕遺構が確認されていることから、鳥紐蓋は酒器の蓋であったとの指摘があります。原型となった鳥は、頭部の冠羽の表現等からみて、池や沼に群れ泳ぐオシドリと指摘されています。ただし、なぜ酒器をオシドリに模しているのかは不明です。

紀年銘の墨書がある石（平安時代）



20. 紀年銘の墨書がある石

法華寺町で発見された、9世紀の大型の井戸の枠内から出土しました。主に石英の粒状結晶からなる変成岩である珪岩の破片に墨書されたもので、直角に交わる割れ目に「嘉祥元年」(848年)と書かれ、その上部にも釈読不明な文字がみとめられます。

年号が墨書されている点は、出土遺構や一緒に出土した遺物の年代を考える上で貴重な資料といえますが、その用途や、なぜ年号が墨書されているものかは不明です。

巴紋軒丸瓦（平安時代）

わが国の古代の軒丸瓦は蓮華紋が主流でしたが、中世以降の軒丸瓦の紋様は、巴紋が主流となり、現在の建物でもほとんどの瓦葺き屋根で巴紋をみることができます。

瓦の巴紋の意味については、水の渦を表したもので、防火の効果があると、江戸時代には広く伝わっていました。

ところが、巴紋を飾った最も古い軒丸瓦は11世紀中頃で、蓮華紋の中央（中房部分）に巴紋を飾る巴蓮華複合紋であることがわかってきました。仏教世界においては、蓮華は天空を漂いながら、光り輝く光明の象徴で、天人が蓮華から誕生する、「蓮華化生」という思想があります。このことから、巴蓮華複合紋は、仏教における蓮華化生を表したもので、巴紋は蓮華が中心から光を放ちながら旋回する様子をあらわしているものとの見方が有力になっています。

大安寺では12世紀初めの経楼再建時に、巴蓮華複合紋と巴紋軒丸瓦の両方が使用されていたとみられ、これが巴紋軒丸瓦でも古いもののひとつといえます。

なお、巴紋は右巻き巴、左巻き巴と分類されることがありますが、水の渦説では外側から中心へ、蓮華旋回説では中心から外側へ、それぞれ展開していることになりまますから、いずれの説をとるかで、全く逆の巻き方向となってしまいます。



21. 大安寺出土経楼再建時の巴蓮華複合紋・巴紋軒丸瓦

漢数字を墨書した土器片（室町時代）



22. 漢数字を墨書した土器片（上段2点は新薬師寺出土、その他は奈良町遺跡出土品）

土師器の皿のかけらの内外二面に、それぞれ同じ漢数字が墨書されています。

奈良町遺跡出土品は15世紀後半の土坑から出土しました。それぞれ漢数字「一」・「三」・「五」・「七」・「八」・「九」・「十」と墨書されています。

新薬師寺出土品は、16世紀後半の土坑から出土しており、奈良町遺跡出土例の約100年後のものですが、同様に漢数字「五」・「六」が墨書されています。

計算に使ったものでしょうか。あるいは何らかのゲームに使った可能性も考えられます。

ヘラ書きがある備前産陶器甕（室町時代）



23. 「三入」のヘラ書きがある備前産陶器甕とヘラ書

奈良町遺跡で、天文元年（1532）の一向一揆で焼失したとみられる蔵の中から、甕とその抜き取り穴が42個も見つかりました。みつかった甕のひとつは、備前国（岡山県）で焼かれた大甕で、高さ約94 cm、口縁部径約66 cm、胴部最大径80 cm、底部径46 cmです。口縁部と肩部には自然釉が厚くかかっています。底部には焼成時に生じたひび割れがあり、そこには漆を染み込ませた布を充填しています。肩部には「三入」の文字が焼成前にヘラで

書かれています。備前産陶器の大甕には他にも「三石入」とヘラ書きされたものがあることから、ヘラ書きの「三入」は「三石入る」の意味とみられます。ところが実際には三石（540リットル、おおよそドラム缶で3本分弱）も入りません。どのような意味で書かれたものか気になるヘラ書きです。

線刻画がある瓦（江戸時代）



24. 線刻画がある瓦と人物画の細部

興福寺の子院のひとつであった最勝院の発掘調査で出土しました。17世紀から19世紀中頃にかけての平瓦の凹面に、人とみうけられる像が、鋭い金属製の道具を使って、線刻されています。ざんばら髪で、顔はやや下向き、手は左右に伸ばしているようです。四角で表現された服の下には足が描かれています。足下には端部が上向きに反った線が描かれており、船に乗っていることを表現しているようにもみえます。^{たわむ}戯れに描かれたものとおもわれ、線刻画の意味は不明です。平瓦の焼成後に描かれていますので、瓦工が描き手の可能性は少ないとみられます。

Ⅲ. ナニこれ! どのように使ったの?

出土品のなかには、通常のものに比べサイズが異なるもの、あるいは必要なはずの部分が無いもの、逆に何かが付属するものもあります。

ここではそのような、何であるかはわかるものの、どのように使われたものか、よくわからないものを紹介します。

蓋に突起が付いた亀甲形陶棺（飛鳥時代）



25. 蓋に突起が付いた陶棺

陶棺は埴輪づくりの技術を応用した素焼きの棺です。奈良市北西部には陶棺を納めた横穴墓が集中しており、土師氏にかかわる人々の墓と考えられています。秋篠阿弥陀谷横穴は最近発見された遺跡で、1号墓から興味深い陶棺がみつかりました。

1号墓陶棺は棺身と棺蓋で構成され、全長は189cm、高さは88.5cmです。棺身・棺蓋ともに縦横に突帯を貼り付けた、格子状の装飾がほどこされています。脚は6行2列に配置し、12脚あります。7世紀前半につくられたと考えられます。

陶棺の棺蓋の稜線突帯と縦位突帯の交差点上の扁平な小さな突起は特徴的です。同じような突起がある陶棺は他に例がありません。何かを模した装飾であるのか、あるいは棺身と棺蓋とを紐で縛って固定する際に利用するような実用的なものであるのか、気になるところです。なお岡山県定国古墳出土陶棺には、半環状の突出を認める資料があるものの、関連性は不明です。

円筒形陶棺（飛鳥時代）



26. 円筒形陶棺

土師氏にかかわる人々の墓とみられる赤田横穴墓群から出土しました。大・小二つあり、両方とも9号墓から出土しました。大形品は口径約30cm、高さ約85cmです。小型品は口径約27cm、高さ約67cmです。いずれも平底で、自立することができます。口縁部から7cm程度下には蓋受けがめぐり、半球形の蓋が載るようになっています。蓋受けには径0.5cm前後の孔が8~20cm間隔であいており、蓋がはずれないよう紐で縛って固定するための紐孔ではないかと推測できます。大小とも7世紀中頃につくられたと考えられます。

大人の遺体をそのまま納めるには小さすぎますので、子供用と考えることもできますが、7世紀中頃の陶棺は小型化する傾向が指摘されており、そう単純なものでもないのかも知れません。あるいは遺体を骨にした後、骨だけを納めるための再葬用容器として使用された可能性も考えられます。ただし、いずれの場合でも、どうしてこのような形なのかは、わかりません。



27. 円筒形陶棺出土状況

側面に紋様がある磚せん（飛鳥時代）



28. 側面に紋様がある磚

横井廃寺は7世紀前半に建てられた、奈良市域で最も古い寺院のひとつです。ここでは、側面に幾何学紋様をしりふ状に飾った磚（古代のレンガ）がみついています。中国や朝鮮半島では側面に紋様がある磚が、磚室墓の構築部材に多用されていますが、わが国では側面に紋様を飾る磚は珍しく、この他には2箇所でしかみついています。このようなことから、戦前には横井廃寺の紋様磚は、楽浪郡の墓室等の磚が、間違っあやまって報告されたものではないかという疑問が出されたこともありました。

用途としては、金堂内部の仏像を置く、須弥壇しゆみだんの構築部材であったとの指摘があります。

平城京出土の無文銀錢（飛鳥時代）



29. 平城京出土の無文銀錢

無文銀錢は、鑄造し、圧延した銀板を円形に切り取って製作された円板で、今までに、畿内を中心に25点の出土例が確認されています。

平城京右京二条三坊七坪から出土した無文銀錢は、直径3.02 cmで、厚さは均一ではなく約0.2 cm、重さは8.96 gです。中央に最大0.37 cmの小孔があり、釘状のもので貫かれています。無文銀錢の重量は、古代の重量単位の1分（=6銖しゆ=10.5 g）とみられていますから、本資料はやや軽いことがわかります。

無文銀錢は『日本書紀』の天武天皇12年（683）4月15日の記事にみえる、このとき使用を禁止された銀錢とみる説が有力です。このようなことから、平城京出土の本例は、貨幣では無く、奈良時代は銀地金ぎんじがねであったと考えられます。なお無文銀錢は、製作開始年や製作地についても、よくわかりません。

無紋軒平瓦（奈良時代）



30. 無紋軒平瓦
（右下は凸面側）



瓦屋根のなかで人の目に付きやすい軒先を飾るため、軒平瓦は一方の端面を厚めに作り、^{はん}范とよばれる紋様のある型に押しつけて、唐草紋等の紋様を飾ります。この紋様のある部分は^{がとう}瓦当と呼ばれます。ところが、平城京内の2箇所の発掘調査地点では、紋様が無い軒平瓦が出土しています。

1点は右京二条二坊十五坪で発見された8世紀後半の井戸の枠内から出土しました。もう1点は右京五条五坊十一坪で発見された柱穴から出土しましたが、時期は不明です。ただし奈良時代前半の軒平瓦にみられる、凸面側の瓦当部と平瓦部の間に段差をつけた^{たんあて}段顎であることから、8世紀前半のものとみられます。2点ともに瓦当面は平滑に調整しています。目立たない場所に^ふ敷かれたものでしょうか。

大安寺出土の紺色のガラス片（奈良時代）



31. 大安寺出土ガラス片

約2.3 cm×約1.1 cmの小さなガラスの破片です。大安寺の講堂と金堂の間に広がる焼土層から出土しました。焼土層は出土土器の年代から寛仁元年（1017）の火災によるもので、ここからの出土品は金堂にあったものとみられています。

科学分析の結果、ガラスの原料となる^{けいしつ}珪砂に炭酸ソーダと石灰石を混入し、溶解させて作ったアルカリ石灰ガラスで、地中海周辺の古代ガラスの特徴を示して

いることから、ローマンガラス系統とみられます。ローマンガラスは9世紀には生産されなくなるとの見解が出されており、本資料も古代のものであることは疑いもなく、唐を経由して伝わったものと考えられます。厚さ約0.15 cmの板状のガラスで、端に折れ曲がりが見られますので、容器の可能性も考えられますが、古代の箱形のローマンガラス容器は、我が国には他に例がなく、さらなる調査が必要です。

大型の浄瓶片（奈良時代）



大安寺の境内に取り込まれた5世紀の前方後円墳、杉山古墳の西側の周濠内から出土しました。須恵質の浄瓶の受水口部の破片で、残存高11 cm、胴部と取り付く部分の幅5.5 cmで、受水口部の口径は6.0 cm以上と、通常サイズの3倍程度の大きさがあります。通常サイズの浄瓶の容量は1.2リットル程度ですので、本品から推定される浄瓶は4リットル近くの容量があったと考えられます。この重さの器を持ち上げ、頂部の細長い口から水を飲むのは大変です。

このようなことから、実用品ではなく、^{じょうごん}荘厳具として堂内に置かれたものと思われます。

32. 大型の浄瓶の受水口部

（手前、奥の2点は同じ遺構から出土した通常サイズの浄瓶片）

三足付皿（鎌倉時代）



33. 三足付皿

近鉄奈良駅の北側にあたる奈良町遺跡で発見された土坑から、13世紀前半の土器と一緒に出土しました。

口クロを用いず、手びねりで形を作り出した土師器です。口径約16.7cmの皿の底部に長さ約2cmの短い三足を貼り付けています。口縁端部は内側につまみ上げています。焼成後に径約0.8cmの孔を内側からあけています。

この時代に、このような形態の土器の出土は他に例が無く、何を盛り付け、どのような場で使用されたものか興味深いものです。

面（室町時代）



34. 面

菅原東遺跡で発見された、堀を周囲に巡らせた居館とみられる屋敷内の土坑から、15世紀前半の土器と一緒に出土しました。左側の額^{ひたい}から下顎にかけては焼失しており、鼻は欠けています。ケヤキの一木造りで、表面の一部には黒漆が残っています。額^{しわ}には皺を刻み、目は細長く切り込み、眉と頬^{ほお}がふくらむように表現しています。

こめかみに紐を通す孔があげられていますので、実際に顔につけて用いられたものとみられ、能などで使われた「尉^{しゅう}」とよばれる男性の老人の面との指摘があります。しかしながら、残存長約13.7cm、残存幅9.3cmで、復元しても長さ約14cm、幅約11.5cmにしかならず、顔に被るには、やや小さいものです。また老人の能面によくみられる植毛の痕跡も無く、能面と断定するには疑問も残ります。

ひるもきん 蛭藻金（室町時代）



35. 蛭藻金（左：表面、右：裏面）

蛭藻金は金塊を叩き延ばして長楕円形の薄板状にしたもので、水草のヒルムシロの葉の形に似ることから、そう呼ばれています。表面には槌目^{つちめ}が全面についていますが、裏面は槌目がなく、平滑となっています。完存したものは、16世紀後半の遺跡である滋賀県安土城下町遺跡や福井県一乗谷朝倉氏遺跡で確認されており、江戸時代の小判の原形ともいべきものです。

奈良町遺跡でみつかった蛭藻金は横方向に折り取られ半円形で、長さ2.8cm、幅3.1cm、厚さ

0.1cm、重さ8.4gです。裏面には折り取り面に沿って横方向のタガネ痕が、裏面中央にも縦方向のタガネ痕が残ります。タガネで印をつけた後、折り取って使用したと考えられます。このようなことから、一定の額面が定められた小判とは異なり、金地金^{きんじがね}としても利用されていたと考えられます。

Ⅳ. ナニこれ！どんな願いが？

遺跡からは様々な祭祀・宗教関係遺物が出土します。しかし、考古学は主にものを研究対象としますので、ものとして残らない過去の人間の心の研究は、苦手とするものの一つです。それでも文献史料や民俗学などの成果を比較検討して、さまざまな仮説が出される魅力ある遺物をここで紹介します。

せんぶつ 平城京出土の塼仏（飛鳥時代）



36. 平城京出土の塼仏

（左から、左京三条二坊九坪・右京一条二坊十三坪・右京一条南大路・右京二条三坊十一坪出土品）

塼仏とは、型に粘土をつめて^{はんにくぼ}半肉彫りの仏像をつくり、型から取り出して乾燥させ、焼いてつくった土製品です。^{きんぱく}金箔や^{ぎんぱく}銀箔を貼ったり、彩色したものもあります。用途については、寺院の堂塔内の壁面や厨子の奥壁・扉に固定する^{しやうごん}荘厳具とみられています。また比較的大型品で直立可能な塼仏は、礼拝像であったと考えられています。

塼仏は7世紀後半に盛行しますが、平城京内の宅地・道路からも出土しています。右京一条二坊十三坪・右京二条三坊十一坪・右京一条南大路から出土した塼仏は1枚に上下3段、左右4列に仏をあらわした^{じゅうにそんれんざ}十二尊連坐塼仏の一部分で、このうち十三坪出土品は右上隅、南大路出土品は左下隅にあたります。十二尊連坐塼仏はすべて揃っていれば高さ約18cm、幅約14cmに復元できますが、これらはその一尊分ですので、高さは約6cm、幅は4cm程度です。左京三条二坊九坪から出土した塼仏は^{ほうげいさんぞん}方形三尊塼仏の一部分で、^{ちゆうぞん}中尊と向かって左の^{わきし}脇侍部分が残存しています。復元しても高さ約7cm、幅5cm程度と小型の塼仏です。

これらの塼仏は、まとめて出土したものではありません。このような出土状況から、日常携帯して拝む個人的信仰のための^{ねんじぶつ}念持仏として使用されたものとみられます。平城京造営に先立つ7世紀のもので、親から子へ、孫へと伝えられた念持仏であったとも想像されます。

みつぶう 密封した土器を重ねた埋納遺構（奈良時代）

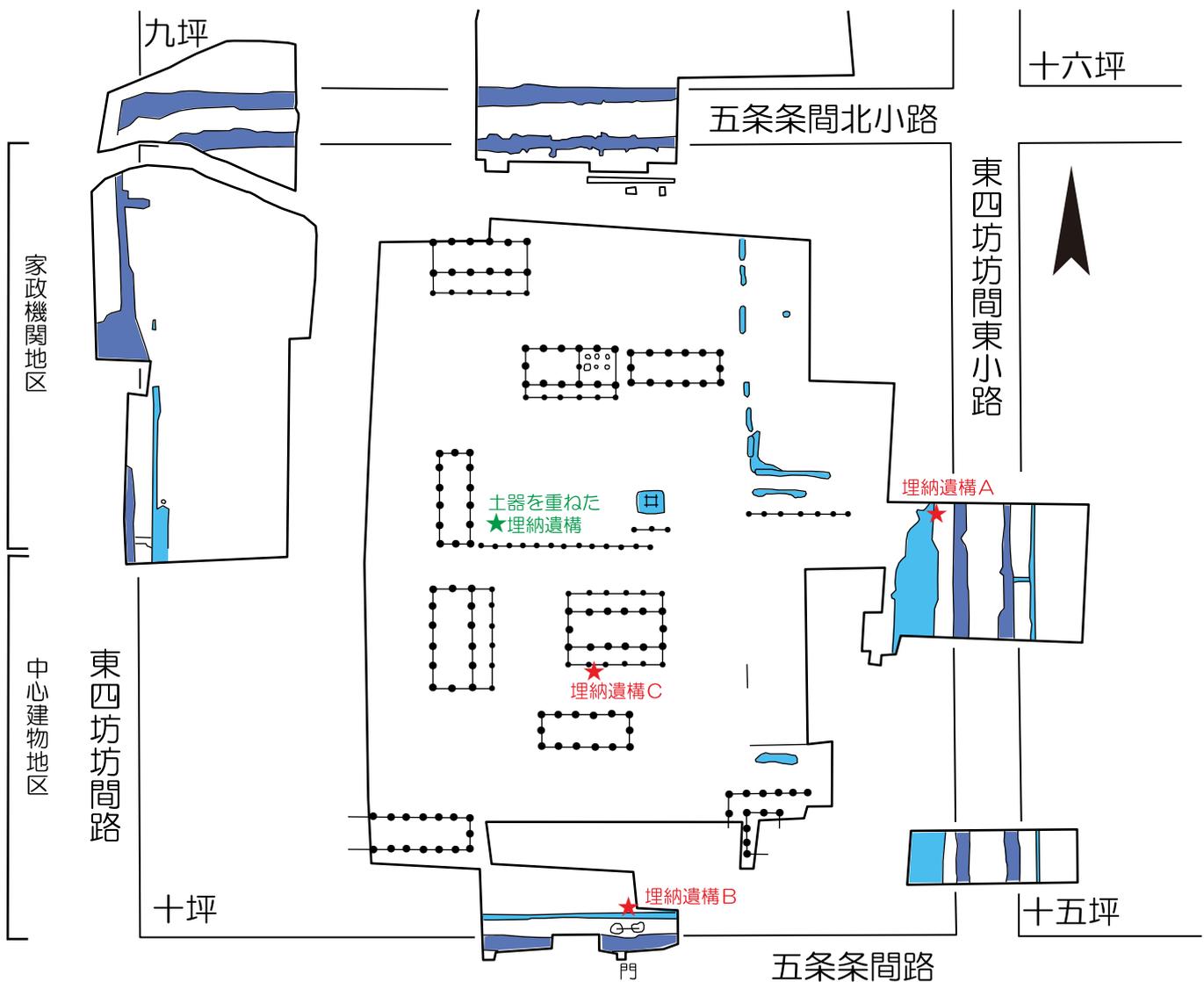
埋納遺構とは「何かを意図的に埋めて納めた跡」のことで、平城京内では100例以上みつかっています。平城京左京五条四坊十坪では珍しい埋納遺構がみつかりました。

蓋をした須恵器の杯が2つ上下に重ねて穴の中に据えられていました。蓋の直径は19cm前後、杯の直径は約18cm、高さは約6cmです。穴の大きさは南北約26cm、東西約29cmの楕円形で、深さは約12cmですので、重ねた土器を埋めるのにちょうど良い大きさの穴を用意したと考えられます。上段の杯の中には何も残っていませんでした。下段の杯には和同開珎が4枚以上、ほかに小石、鉄滓、小さな土の塊などが納められていました。

埋納遺構の性格は、土地や建物に災いが起きないように行^{じちん}地鎮・^{ちんたん}鎮壇、生まれた子どもの長寿などを祈って、地中に胎盤を納める^{えな}胞衣埋納、または墓等と考えられています。胞衣埋納であれば、誕生した双子の長寿などを祈ったものでしょうか。



37. 密封した土器を重ねた埋納遺構 (左上は出土状況)



38. 平城京左京五条四坊十坪の8世紀後半の主要遺構模式図 (1/1,000)

宅地の四方と中央でみつかった埋納遺構（奈良時代）

平城京左京五条四坊十坪では他にも珍しい埋納遺構がみつかっています。

埋納遺構Aは十坪の東辺中央でみつかりました。直径約60cmの穴に、須恵器の長頸壺と奈良三彩の小型火舎かしや（仏教の行事で使う香炉こうろの一種）を納めていました。埋納遺構Bは十坪の南辺中央でみつかりました。一辺約50cmの方形の穴に、須恵器の長頸壺を置き、その横に土師器の皿、そして皿の周りには椀を7つ納めていました。埋納遺構Cは十坪のほぼ中央南側に位置する中心建物のすぐ南でみつかりました。直径約40cmの穴に、須恵器の長頸壺と奈良三彩の小型火舎が置かれ、その横に土師器の椀を6つ重ねて納めていました。

これらの埋納遺構の十坪内における位置関係から、十坪全域を対象にした地鎮遺構とみられ北・西側にも同様の埋納遺構があったと考えられます。平安時代になると真言宗・天台宗の地鎮修法が広まりますが、それ以前の初期密教（雑密）の祭祀形態を伝えるものと考えられます。



39. 宅地の四方と中央でみつかった埋納遺構（上から埋納遺構A・B・C、右は出土状況）

焦がして描かれた人形ひとがた（奈良時代）



40. 焦がして描かれた人形（右は顔の細部）

平城京右京二条三坊六坪で発見された8世紀前半の井戸の枠内から出土した人形です。

人形は人間の形代として作られたもので、はらえ祓・治療など様々なまじないに用いられたと考えられています。この資料は長さ22.5 cm、幅4.4 cm、厚さ0.5 cmで、材質はヒノキです。

頭部はその輪郭線と顔が、胴部にも輪郭線の一部と、衣のヒダとみられる描線が確認できます。保存処理の過程で、これらの描線が焦げており、墨描きではないと判明しました。線香のようにゆっくり燃える道具の火を人形に押し付けながら、焦がして描いたものとみられます。焦がしながら描かれた人形は、他に例を聞きません。なお眉間には一辺0.2cmの方形の孔があげられており、釘を打ちつけられていたものとみられます。

どんな願いが込められていたのか気になるところです。

鳥形（奈良時代）



41. 鳥形

西大寺跡で発見された8世紀後半頃の溝から出土した木製の鳥の形代です。長さ2.1 cm、幅9.4 cm、厚さ0.3 cmの小さな鳥形です。薄板を加工して鳥の側面形を表現しています。片面に線刻で目と羽毛を表現しています。材を割り裂いて製作する際に

窪んだ尻尾の先端は、墨で黒く塗られています。裏面は割り裂いたままで、ほぼ調整はしていません。材質はスギです。

平城京出土の鳥形は、馬形などと同様に、神への供え物とみられ、鷹等の猛禽類や水鳥、あるいは鶏を表現したものと多様ですが、この鳥形がどのような鳥を表現したものは不明です。

控えめな人面墨書土器（奈良時代）



42. 控えめな人面墨書土器

人面墨書土器は、壺や甕などの土師器の側面に、墨で大きく顔を描いた土器です。その顔はどんぐりまなこ眼や、つり眼めで大きな団子鼻だんごばなを持ち、ヒゲを生やし、恐ろしげな表情をしているものが大半で、疫病神の顔をあらわしたとの指摘があります。

そういった一般的なものと比べると、一見変わった人面墨書土器が、平城京左京三条三坊十一坪内を流れる東堀河から出土しています。

描かれた土器自体は粘土紐による成形痕をのこす粗製の小型壺で、人面墨書土器に多用されるものです。ところが、顔はとても小さく描かれ、笑っているようにみえます。通常の人面墨書土器に比べ、とても控えめな表現ですが、軽妙な筆使いで描かれています。控えめな画工が描いたものでしょうか。

束ねられた人形（平安時代）



43. 束ねられた人形（左：表、右：裏）



44. 束がほどけた人形「伊勢竹河」

法華寺町で発見された9世紀後半の井戸の枠内から出土しました。最も外側にくる人形が内向きになるようにして、7枚ないし8枚が重ねられ、頭部に1箇所、胸部に2箇所の木釘または紐通しの孔があげられ、紐で縛られています。束がほどけた人形は全て胸部に「伊勢竹河」の人名が書かれており、束ねられた人形も全て「伊勢竹河」と書かれていると推定でき、その枚数は51枚となります。顔にはヒゲの表現があることから、男性の人形と判断できます。木釘を打ったり、紐で縛ったりと、他人を呪う人形にもみえます。一方、病気の治癒等を願って、何枚も用いた自分自身の形代をまとめて廃棄する際に、束ねたものであったとも考えられます。

緑釉陶器の瓶に封入された人形（平安時代）

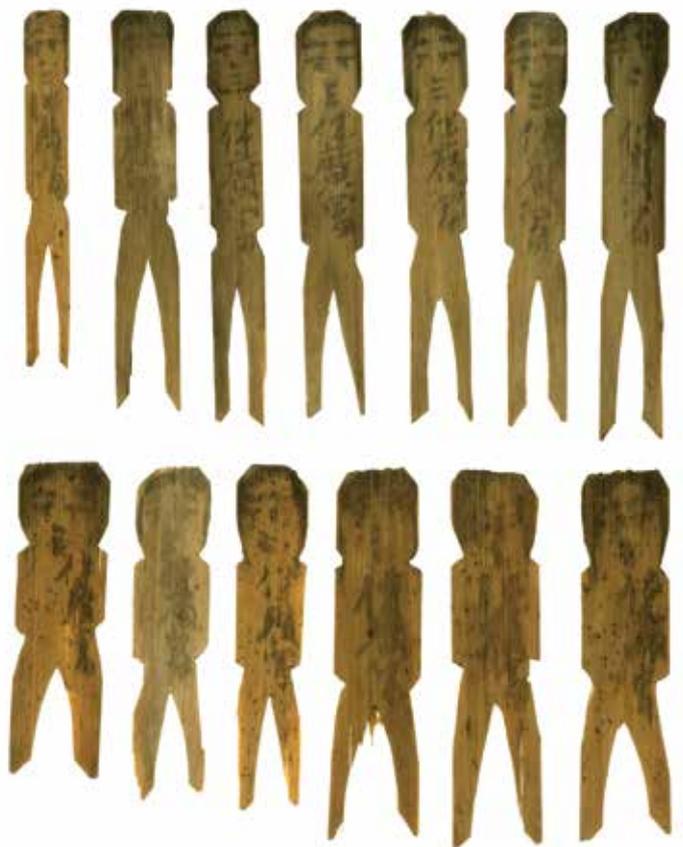
束になった人形が出土した井戸の枠内からは、いまひとつ、変わった状況で人形が出土しています。こちら胸部に人名が書かれていますが、「伊勢宗子」、「秦奈良子 又名栗日」、「伴廣富」と3種類あり、それぞれ6枚、17枚、13枚あります。その他「伊勢宗子」と「秦奈良子 又名栗日」が表裏に書かれたものが1枚あります。これらは人形「伊勢竹河」よりも全体的に小さく、顔の表現にヒゲは無く、女性と思われます。これら37枚の人形は全て、緑釉陶器の瓶の中に封入されていました。束ねられていた形跡はありません。こちら他人を呪う人形ではなく、病気の治癒等を願って、何枚も用いた女性達の形代をまとめて廃棄する際に、緑釉陶器の瓶の中に集めただけであったとも考えられます。男性と女性の人形では廃棄手順も異なっていたことを示すものかもしれません。



45. 緑釉陶器の瓶とその中に封入されていた人形



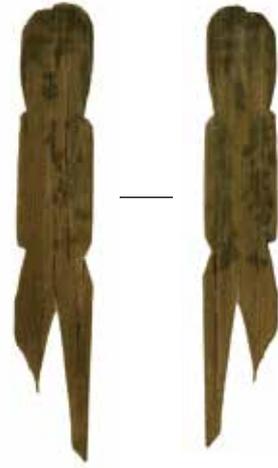
46. 人形「秦奈良子 又名栗日」



47. 人形「伴廣富」



48. 人形「伊勢宗子」



49. 表裏に異なる人名が書かれた人形
左：「伊勢宗子」 右：「秦奈良子 又名粟日」

立体人形（平安時代）



50. 立体人形

法華寺町で発見された9世紀後半の井戸の枠内からは、立体の木製人形も出土しています。長さ2.5cm、横断面はほぼ円形で径約1.4cmの小さな人形の頭部です。

眉・目・鼻・口を彫って表現し、眉と目の部分は墨が塗られています。

特筆すべきは材質で、樹種同定の結果、サンショウであることがわかりました。サンショウは搗り粉末の材料となる木として有名ですが、これを用いた人形は他に聞きません。

サンショウは、あまり強くなくやや柔らかい材で、比較的加工が行ないやすいため、顔などの細工は容易であったとみられますが、サンショウを素材とする理由が他にもあるのではないかと、気になるところです。

土師器の皿で密封された齋串（平安時代）



51. 土師器の皿と密封された齋串



52. 上：出土井戸 下：出土状態

斎串は短冊状の薄板の上下両端を尖らせて、側面を削ったり、切り込みを施した串状の木製品で、神聖な場を表示し、結界を象徴する祭祀具とみられています。また祓^{はらえ}に使用されたとみられる溝や河川からの出土例もあります。

西九条町で発見された 10 世紀中頃の井戸の枠内からは、変った出土状況の斎串5点がみつかっています。いずれも全長 8.8 cm、厚さ 0.3 cm 程度の小さなもので、側面からの切り込みは左右4箇所^{はらえ}に施されています。材質は全てヒノキです。これらの斎串は全て、2枚の土師器の皿を用いて密封された状況で出土しました。清浄な水を得るためのまじないに使われたものと考えられます。

木偶（平安時代）



53. 木偶



54. 木偶出土井戸

高天町の奈良町遺跡でみつかった井戸の枠内から、11 世紀末から 12 世紀前半の遺物とともに出土しました。

高さ 27 cm、最大径 9.5 cm の丸太材の片側に、目・鼻・口を彫って顔を表現しています。

頭部側の端面は水平に成形されていますが、脚部側の端面は材を打ち欠いた痕跡をのこしたままであり、自立できません。祀る際には、別に作った衣装を着せることにより、自立させたと思われます。北海道のニポポ人形のようなようですが、平安時代の類例は他に見当たりません。また材質はコウヤマキで、丈夫で朽ちにくく、水に強いなどの特性を持ち、弥生時代から古墳時代にかけては木棺に用いる木材として顕著ですが、コウヤマキを用いた木偶は他に類例を聞きません。

土師器高台付皿（室町時代）



55. 土師器高台付皿

北室町の奈良町遺跡から、14 世紀末から 15 世紀初めの井戸の枠内や土坑から出土しました。ロクロを使わず、手づくねで作られた、高い台のついた素焼きの皿です。

現在でも春日大社で祭事の際に神饌^{しんせん}を盛る土器「ゴンパイ」とよく似ています。「ゴンパイ」は古代の土器^{たかづき}「高杯」の音読み「コウハイ」が変化したものと思われます。史料では江戸時代に「コハイ」、明治時代には「コンバイ」、昭和初期には「ゴンバイ」とよばれていたことがわかります。

このようなことから、古代の高杯の系統を引く土器が「ゴンパイ」で、室町時代の高台付土師器皿はこの間を埋める資料と評価できます。

祭りに使う土器とみて、間違いのないようですが、どんな願いをかなえてもらうために、どのようなものが盛られ、神前に供えられたのか気になるところです。

こけら経（鎌倉～室町時代）

大宮町七丁目で発見された河川からは 14 世紀から 16 世紀にかけてのこけら経が約 1 万点出土しています。

こけら経とは、厚さ 1 mm 程度のヒノキやスギなどの薄板を塔の形に成形し、その両面あるいは片面に法華経等の経文を写経したものです。主に死者の追善供養や来世での幸福を祈ることを目的として作られたと考えられています。

発見例は全国約 50 ヶ所以上あり、河川や池など水辺に關係する場所での発見が多いことから、製作後に水に流す供養形態であったという指摘があります。ただし墓地・堀・寺院本堂の天井裏・寺社の基壇・石窟などでの発見例もあることから、疑問も残ります。あるいは本来、こけら経は造塔と写経の功德を一度に得るため、すなわち製作すること自体に意義があるもので、こけら経の発見場所は単に投棄された場所ということも考えられます。



56. こけら経（五輪塔形）表・裏



57. こけら経（壺頭形）表・裏

犬形土製品（室町～安土桃山時代）

5cm程の大きさと、手づくねでつくられた素焼きの土人形です。16世紀後半から17世紀初頭にかけての全国各地の遺跡で出土しており、特に大坂城三の丸跡では102点が集中して発見されていることから、大坂が流行の中心地であったとみられています。大坂城等で出土している犬形土製品は頭が大きく、耳は内側に垂れ曲がり、粘土をつまみ出したような短い四肢と巻いた尻尾が特徴的で、柴犬の小犬をかたどったようにみえます。

ただし、奈良市内の出土品には短く太い鼻筋に左右に垂れる耳、頭部に丸みを帯び、太っちょで、黒く瓦質で焼き上げられたものが目立ち、これらは大和産とみられます。なお、奈良市では15世紀後半頃と、時期的に古いものが今小路町の奈良町遺跡で出土しています。

犬は多産で、安産のシンボルとされることから、犬形土製品は安産のお守りと理解されています。一方、当時の日本の中心だった大坂で、土産物や玩具として売られたものとする見方もあります。なお豊臣氏の隆盛時に盛んに作られた反面、豊臣氏が滅びた17世紀中頃に出土しなくなるのは、何らかの関係があるのではという指摘もあります。



58. 犬形土製品



59. 大坂産とみられる犬形土製品



60. 大和産とみられる犬形土製品



61. 15世紀後半頃の犬形土製品

ミニチュア土器に封入された犬形土製品（安土桃山時代）



62. 秋篠阿弥陀谷遺跡出土犬形土製品



63. 秋篠阿弥陀谷遺跡犬形土製品封入状態

奈良市の北西部、秋篠寺の南西で発見された秋篠阿弥陀谷遺跡の安土・桃山時代の火葬墓では、犬形土製品が珍しい状態で

出土しています。その墓は一辺約0.8m、深さ約0.6mの方形の掘方の南と西側に、火輪などの石造物を置いて囲った中に、木櫃を納めていました。中には骨は残っていませんでしたが、副葬品として瓦質土器風炉（茶道で湯を沸かす道具）・羽釜等ミニチュア土器が13点納められていました。犬形土製品1点はミニチュア風炉の中に納め、羽釜で蓋をするかたちで、みつかりました。この火葬墓のものとみられる墓石には「天正十七年（1589）十月十日 尊壽童女」という子どもの戒名が刻まれていました。墓主が子どもであれば、この場合の犬形土製品は安産のお守りとみるよりも、副葬品のミニチュア土器類と同様に、子どもが生前に大事にした玩具の可能性が高いと考えられます。

墨書皿（江戸時代）

新薬師寺の土坑から発見された土師器の皿です。皿の形態から17世紀中頃の土器と考えられます。

内面中央に「南無妙法蓮花経」と縦書きし、その左右に金剛業菩薩をあらわす梵字「キャン」を記しています。金剛業菩薩は、五大菩薩の一尊で、金剛界曼荼羅では北方に住する不空成就如来の周囲に配される四親近菩薩の筆頭で、金剛界四印会では大日如来の北に位置します。このようなことから、北を意味するものとして、仏教の祈禱に用いられたようですが、具体的な用途は不明です。



64. 墨書皿

令和4年度特別展 展示品目録

I. ナニこれ！コレなに？

写真番号	展示品名	時期	出土遺跡名	調査回数	出土地	出土遺構
1	円柱状突起がある土製品	縄文時代晩期	(仮称)大森遺跡	HJ557	大森町	河川
3	杓子形木製品	弥生時代後期	(仮称)大森遺跡	HJ459-2	大森町	土坑
4	刺突紋がある土器	弥生時代後期	東九条町所在遺跡	HJ709	東九条町	溝
5	石製有孔円板	5世紀	ベンシヨ塚古墳	BZ1	帯解町	第3埋葬施設
6	唐三彩陶枕65点	8世紀	大安寺旧境内	DA133	大安寺二丁目	焼土層
7	球状土製品	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
9	車形木製品	13世紀	二条大路南一丁目所在遺跡	HJ262	二条大路南一丁目	粘土採掘坑
	車形木製品(復原模型)	20世紀	—	—	—	—
11	孔が無い円板状土製品21点	8～16世紀	平城京跡・奈良町遺跡他	HJ605他	今小路町他	遺物包含層他
12	孔がある円板状土製品28点	8～16世紀	平城京跡・奈良町遺跡他	HJ24他	柏木町他	遺物包含層他
13	穴がある円板状土製品2点	8世紀	平城京東市跡推定地他	TI6他	東九条町他	遺物包含層他
14	円柱状土製品	時期不明	奈良町遺跡	HJ117	西之阪町	遺物包含層

II. ナニこれ！何を表現？どんな意味が？

写真番号	展示品名	時期	出土遺跡名	調査回数	出土地	出土遺構
15	絵画土器(甕)	弥生時代後期	(仮称)芝辻遺跡	HJ375	大宮町七丁目	河川
	絵画土器(壺)	弥生時代後期	(仮称)芝辻遺跡	HJ375	大宮町七丁目	河川
	絵画土器(長頸壺)	弥生時代後期	(仮称)三条遺跡	HJ446	三条本町	河川
16	石見型埴輪3点	5世紀後半	菅原東遺跡	HJ257-2	西大寺国見町三丁目	溝
17	人面が付いた浄瓶片	8世紀	東大寺旧境内	TD11	雑司町	遺物包含層
18	リボン記号の墨書土器蓋1点	8世紀後半	平城京東市跡推定地	TI27	東九条町	井戸枠内
	リボン記号の墨書土器杯3点	8世紀後半	平城京東市跡推定地	TI27	東九条町	井戸枠内
19	鳥紐蓋	8世紀後半～9世紀前半	平城京跡(右京二条三坊四坪)	HJ276	菅原東二丁目	井戸掘方
	鳥紐蓋	9世紀	平城京跡(右京二条三坊二坪)	HJ283	西大寺国見町一丁目	井戸枠内
	鳥紐蓋	8世紀末	平城京跡(左京五条条間北小路)	HJ623-B	大森町	小路北側溝
20	紀年銘の墨書がある石	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
21	巴蓮華複合紋軒丸瓦	12世紀初め	大安寺旧境内	DA81	大安寺四丁目	整地土
	二巴軒丸瓦	12世紀初め	大安寺旧境内	DA81	大安寺四丁目	整地土
22	漢数字を墨書した土器片7点	15世紀後半	奈良町遺跡	GG48	北室町	土坑
	漢数字を墨書した土器片2点	16世紀後半	新薬師寺	SY2	高畑町	土坑
23	へら書きがある備前産陶器甕	16世紀前半	奈良町遺跡	HJ482	椿井町	埋甕遺構
24	線刻画がある瓦	17世紀以降	奈良町遺跡	NR1	高畑町	遺物包含層

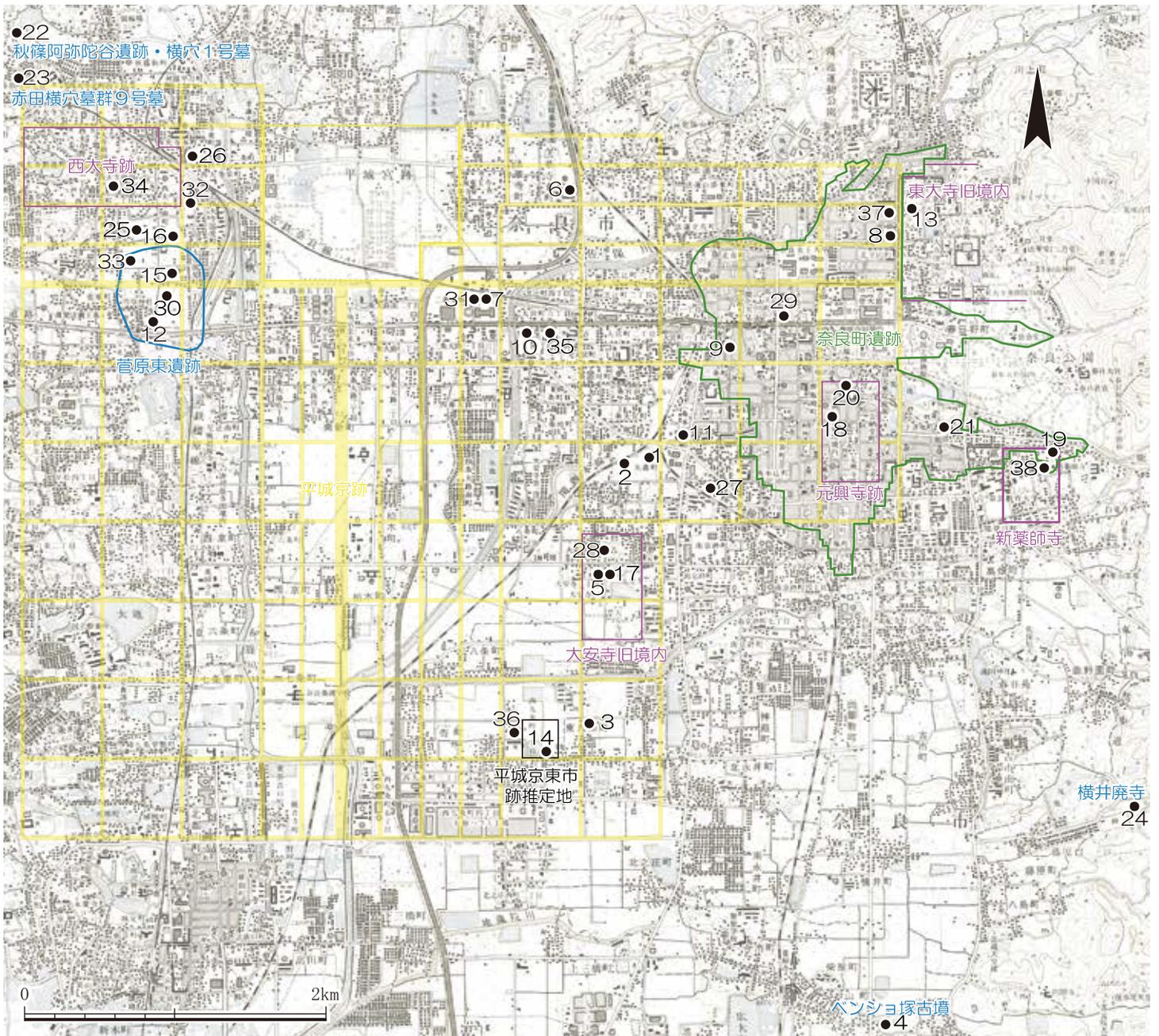
III. ナニこれ！どのように使ったの？

写真番号	展示品名	時期	出土遺跡名	調査回数	出土地	出土遺構
25	土師質亀甲形陶棺	7世紀前半	秋篠阿弥陀谷横穴1号墓	AAM1	秋篠町	横穴墓
26	円筒形陶棺(大)	7世紀中頃	赤田横穴墓群9号墓	AD2	西大寺赤田町一丁目	横穴墓
	円筒形陶棺(小)	7世紀中頃	赤田横穴墓群9号墓	AD2	西大寺赤田町一丁目	横穴墓
28	紋様埴	7世紀前半	横井廃寺	—	横井町	採集品
29	無文銀銭	7世紀	平城京跡(右京二条三坊七坪)	HJ378-2	西大寺国見町二丁目	遺物包含層

写真番号	展示品名	時期	出土遺跡名	調査回数	出土地	出土遺構
30	無紋軒平瓦	8世紀前半	平城京跡(左京五条五坊十一坪)	HJ478	西木辻町	柱穴
	無紋軒平瓦	8世紀後半	平城京跡(右京二条二坊十五坪)	HJ460	西大寺国見町二丁目	井戸枠内
31	ガラス	8世紀	大安寺旧境内	DA133	大安寺二丁目	焼土層
32	大型の浄瓶	8世紀	大安寺旧境内	DA53	大安寺四丁目	周濠内
	浄瓶(胴部)	8世紀	大安寺旧境内	DA53	大安寺四丁目	周濠内
	浄瓶(頸部)	8世紀	大安寺旧境内	DA53	大安寺四丁目	周濠内
33	三足付皿	13世紀前半	奈良町遺跡	HJ729	西御門町	土坑
34	面	15世紀前半	菅原東遺跡	HJ169	西大寺国見町二丁目	土坑
35	蛭藻金	16世紀後半	奈良町遺跡	GG48	北室町	整地層

IV. ナニこれ!どんな願いが?

写真番号	展示品名	時期	出土遺跡名	調査回数	出土地	出土遺構
36	埴仏(方形三尊埴仏)	7世紀	平城京跡(左京三条二坊九坪)	HJ445	二条大路南一丁目	整地層
	埴仏(十二尊連坐埴仏)	7世紀	平城京跡(右京一条二坊十三坪)	HJ587	西大寺南町	柱穴
	埴仏(十二尊連坐埴仏)	7世紀	平城京跡(右京一条南大路)	HJ578	西大寺南町	井戸枠内
	埴仏(十二尊連坐埴仏)	7世紀	平城京跡(右京二条三坊十一坪)	HJ443-2	菅原町	遺物包含層
37	須恵器杯2点、須恵器蓋2点	8世紀後半	平城京跡(左京五条四坊十坪)	HJ579	大森町	埋納遺構
39	須恵器長頸壺、奈良三彩小型火舎	8世紀後半	平城京跡(左京五条四坊十坪)	HJ608-A	大森町	埋納遺構
	須恵器長頸壺、土師器皿・椀7点	8世紀後半	平城京跡(左京五条四坊十坪)	HJ608-E	大森町	埋納遺構
	須恵器長頸壺、奈良三彩小型火舎、土師器椀6点	8世紀後半	平城京跡(左京五条四坊十坪)	HJ608-D	大森町	埋納遺構
40	焦がして描かれた人形	8世紀前半	平城京跡(右京二条三坊六坪)	HJ310-3	青野町	井戸枠内
41	鳥形	8世紀後半	西大寺跡	SD25	西大寺新田町	溝
42	人面墨書土器	8世紀	平城京跡(左京三条三坊十一坪)	HJ499-1	大宮町四丁目	東堀河
43	束ねられた人形	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
44	人形「伊勢竹河」13点	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
45	緑釉陶器瓶と人形34点	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
46	人形「秦奈良子 又名栗日」14点	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
47	人形「伴廣富」13点	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
48	人形「伊勢宗子」6点	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
49	表裏に異なる人名が書かれた人形	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
50	立体人形	9世紀後半	法華寺町所在遺跡	HJ440	法華寺町	井戸枠内
51	土師器皿2点、斎串5点	10世紀中頃	西九条町所在遺跡	HJ203	西九条町一丁目	井戸枠内
53	木偶	11世紀末~12世紀前半	奈良町遺跡	HJ559	高天町	井戸枠内
55	土師器高台付皿8点	14世紀末~15世紀初め	奈良町遺跡	GG62	北室町	井戸枠内・土坑
56	こけら経(五輪塔形)6点	15世紀後半~16世紀	大宮町所在遺跡	HJ247	大宮町七丁目	河川
57	こけら経(圭頭形)6点	14世紀~16世紀	大宮町所在遺跡	HJ247	大宮町七丁目	河川
58	犬形土製品15点	15世紀後半~17世紀初め	奈良町遺跡他	HJ672他	今小路町他	井戸枠内他
59	犬形土製品4点(推定大坂産)	17世紀頃	奈良町遺跡他	GG48他	北室町他	土坑他
60	犬形土製品8点(推定大和産)	15世紀後半~17世紀初め	奈良町遺跡他	HJ672他	今小路町他	井戸枠内他
61	犬形土製品4点(推定大和産)	15世紀後半	奈良町遺跡他	HJ672	今小路町他	井戸枠内
62	犬形土製品2点	16世紀末	秋篠阿弥陀谷遺跡	AAM1	秋篠町	火葬墓
63	ミニチュア風炉・羽釜・小壺・犬形土製品	16世紀末	秋篠阿弥陀谷遺跡	AAM1	秋篠町	火葬墓
64	墨書皿	17世紀中頃	新薬師寺	SY3	高畑町	土坑



展示品出土位置図 (1/40,000)

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 円柱状突起がある土製品・鳥紐蓋 2 杓子形土製品、密封し重ねて埋納された土器、地の四方と中央に埋納された土器 3 刺突紋がある土器 4 石製有孔円板 5 唐三彩陶枕、ガラス 6 球状土製品、紀年銘の墨書がある石、束ねられた人形、人形を封入した緑釉陶器瓶、立体人形 7 車形木製品 8 円板状土製品 9 円柱状土製品 10 絵画土器（甕・壺）、こけら経 11 絵画土器（長頸壺） 12 石見型埴輪 13 人面が付いた浄瓶片 14 リボン記号の墨書土器 15 鳥紐蓋 16 鳥紐蓋 17 巴蓮華複合紋・二巴紋軒丸瓦 18 漢数字を墨書した土器片、蛭藻金、土師器高台付皿、犬形土製品（推定大坂産） | <ul style="list-style-type: none"> 19 漢数字を墨書した土器片 20 ヘラ書きがある備前産陶器甕 21 線刻画がある瓦 22 土師質亀甲形陶棺、犬形土製品、ミニチュア風炉・羽釜・小壺 23 円筒形陶棺 24 紋様磚 25 無文銀銭 26 無紋軒平瓦 27 無紋軒平瓦 28 大型の浄瓶 29 三足付皿、木偶 30 面 31 埴仏（方形三尊埴仏） 32 埴仏（十二尊連坐埴仏） 33 埴仏（十二尊連坐埴仏）、焦がして描かれた人形 34 鳥形 35 控えめな人面墨書土器 36 土師器の皿で密封された斎串 37 犬形土製品（推定大和産） 38 墨書皿 |
|--|---|

令和4年度 秋季特別展
また！ナニこれ？
—奈良市出土の用途不明品—

平成4年9月26日発行

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター

〒630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地

発行 奈良市教育委員会

〒630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1

